

シナリオ・ワークショップ開催

5月23日に開講 映画塾会員の受講生募集 7月まで土曜夜

開催日 5月23日(午後1時から6時、第4期講座と合同)、29日、6月5日、12日、19日、26日、7月3日、10日(全8回)午後7時から9時
 会場 新潟市万代市民会館
 受講料 1万円(4期受講生と運営スタッフは無料)
 問い合わせ、応募方法 4月30日までに電話かファクスで映画塾事務局に申し込んで下さい。後ほど受講料の納入方法をお知らせします。(担当: ナシモトタオ、郡司健) TEL&FAX 025-248-9088



第六号(九九春)
 編集・発行 にいがた映画塾
 〒950-0086
 新潟市花園2-3-2 飛鳥ビル
 電話・ファクス 025-248-9088

第4期カリキュラム

日時	内容	講師
1 5月9日	10:00- 開講式、ガイダンス ビデオ実習 シナリオ入門	小林茂(撮影監督) 笹崎隆(ビデオカメラマン) ナシモトタオ(ビジュアルリスト)
2 5月16日	映像表現(イメージの具象化・イメージをどう映像化するのか)	青山真治(映画監督)
3 5月23日	シナリオ(基礎から実践、添削)	荒井晴彦(脚本家)
4 5月30日	自己PR(企画書発表)第1回 機材実習(16ミリ、8ミリ、ビデオ、スチールカメラ、露出計、照明などの操作と撮影)	小林、笹崎、ナシモトほか映画塾スタッフ
5 6月6日	個人映画(実験映画、ドキュメンタリー、ビデオなど劇映画以外の映画)	かわなかのぶひろ(イメージフォーラム)
6 6月13日	機材実習及び演技実習=グループ別(16ミリ、8ミリ、ビデオなどの操作と撮影)(発声、身体など演技の基礎)	小林茂、笹崎隆、ナシモトタオ、戸中井三太(劇作家)ほか
7 6月20日	機材実習及び演技実習(希望するものを個人指導) 実習作品合評会	
8 6月27日	自己PR(卒業作品案発表)第2回 映画鑑賞、研究(翌週の予習)	
9 7月4日	映像論	北野圭介(新潟大助教授)
10 7月11日	プロデュース論(変更の場合あり) 自己PR(卒業作品案発表)第3回 制作作品、役割、フォーマットなど検討	古澤敏文(映画プロデューサー)、小林、笹崎、ナシモト、映画塾スタッフほか
11 7月18日	卒業作品決定 グループ分け(個人制作も可)準備、指導、講習、スケジュールなど決定	
12 7月25日	卒業作品撮影準備	
13 8月1日-28日	卒業作品制作(撮影日は調整)	
16 8月29日	卒業作品ラッシュ上映、講評、閉講式	

5月9日と8月を除き、講座時間は午後1時から6時まで

聴講生制度も創設
 第四期は「完走」して初めて身になるカリキュラムになっているが、仕事やその他の都合で四力月の長丁場は無理という人のために「聴講生制度」の枠も設けた。受講料は一回三千円(映画塾会費は一千円)。卒業作品の企画提出できないが、ほかの受講生の作品の手伝いは可能。
 第四期実行委員会では、引き続き受講生を募集している。受講料三万円、定員四十人になり次第締め切り。問い合わせは映画塾、電話025-248-9088へ。

にいがた映画塾は、五月九日開講の「第4期映像実践講座」に併設して、五月二十三日と二十九日から七月十日まで毎週土曜日に「シナリオ・ワークショップ」を開く。講師は脚本家の荒井晴彦氏とナシモトタオ氏。シナリオのイロハから一本のシナリオを書き上げられるようになるまで、添削、講評、指導を行う。映画塾では受講生を募集している。

第4期の「裏講座」
 シナリオ講座については、第一期講座から要望が多く、四期では五月二十三日に荒井氏による講座がカリキュラムに組まれている。しかし、「一に書くこと、二に書くこと」がシナリオ上達の道と言われるだけに、一回だけの講義では「書き方」程度しか教えることができない。

そのため、今回第四期と並行した「裏講座」としてシナリオ学習の密度を高めることになった。講師荒井氏、タオ氏、ワークショップは五月二十三日(日)の第四期講座三回目を合同講座とし、その前の週(十六日)までに提出してもらった簡単なシナリオを荒井氏に講評してもらう。

第4期の概要固まる

映画塾「第4期映像実践講座」の概要がほぼ固まった。八月二十九日まで全十七回のカリキュラムで、個人・実験映画や演技、映画史なども新たにカリキュラムに加わった。キャッチフレーズは「受講生全員が映画をつくる」。過去の講座にも増して濃密な講座になることは間違いない。

16ミリ1人1本権
 一期から三期に比べ、最も特徴的なのは卒業作品制作での「一六ミリ一人一本権」。一本は約三分。どうしても自分の企画を撮りたいければ、少なくとも三分は機会が与えられる。仲間を集めればもっと長い作品をつくることもできる(最長三十分)。また、八ミリやビデオによる撮影を選択することもできる。撮影期間も特に決めず弾力的に対応する。可能な限り受講生の希望を尊重し、作品の選択について強制はしないというのがスタッフの基本姿勢だ。

講師に青山監督ら
 講師は映画監督の青山真治氏(「Heilige S.S.」、「冷たい血」)、脚本家の荒井晴彦氏、東京造形大教授・かわなかのぶひろ氏が東京から来訪する。また映画「白痴」の手塚真監督、古澤敏文プロデューサーも講義を行う予定だ。

県内講師はドキュメンタリー映画の小林茂カメラン、ヴィジュアルリストのナシモトタオ氏、新潟大助教授の北野圭介氏、劇作家の戸中井三太氏が担当。地の利を生かして密接な指導を行う。

毎回課題を出し、翌週までに短いシナリオを書いてくる。それについて講師のほか、受講生が講評、何が必要なのか話し合う。

講師を務める荒井氏は「愛を乞うひと」とも交渉中。

運営スタッフ無料
 ナシモト氏はほぼ全回に出席し、アドバイスされる。

らう。そして二十九日の土曜日から、毎週午後七時から九時までの二時間、新潟市万代市民会館でワークショップを開く。

受講対象は映画塾会員の第四期の受講生、聴講生。会費は会員と聴講生がテキスト代込みで一万円(一括)、第四期生は無料。

映画塾事務局では会員の運営スタッフを募集している。スタッフは準備を手伝う代わりにワークショップの受講料は免除される。

春だ！イベントも百花繚乱

春の訪れとともに、映画塾関係のイベントが続々と始まる。重いコートを脱いで、さあ、出掛けよう！

市民プロデュース講座

(四月十七日午後一時半から新潟市民芸術文化会館・Aスタジオ)

市民参加型の文化イベントの方策を探る。新潟で文化活動を行っている四人が、「新潟で文化活動は花開くか」をテーマにパネルディスカッションを行うほか、映画「白痴」(手塚真監督)のプロデューサー・古澤敏文氏が講演し、「白痴」の現状を報告する。

パネリストは五十嵐政人(にいがた映画塾事務局長)、江口歩(NAMARA主宰)、武内裕子(「キッズ・ユニファ」代表)、高橋建造(「スタジオ・ナッツ」主宰)の四氏。古澤氏の講演では、映画の完成までの経過と今後の上映に向けての抱負、プロの

プロデューサーとして企画のプランニングから実現までをアドバイスする。前売り五百円、当日六百円。問い合わせは電話・ファクス、025 26 2 1910(矢部)。

まひるのほし イベント

(四月二十四日午後三時からシネ・ウインド)

佐藤真監督の新作「まひるのほし」の上映連イベント。佐藤監督と美術評論家・大倉宏氏のトークや映像作品上映。ドキュメンタリーにおける表現についての講義も。千円。問い合わせは025 243 5530(シネ・ウインド)まで。

「A」上映イベント (四月二十四日午後九時開場、九時二十分開始、シネ・ウインド) 「A」は、オウム真理教会の内部に入り、その様子を記録したドキュメンタ

新潟国際情報大 公開講座「映画の中の市民社会」

(五月二十日、六月三日、十七日、七月一日の午後七時、シネ・ウインド)

「市民」及び「市民社会」について、国際情報大の教授が映画を使ってわかりやすく解説する。

映画塾月イチ上映会

(四月九日、五月十四日、六月十一日、七月九日、八月十三日午後八時から新潟大西門わきRoom No. 2001)

四月は真保蔵監督特集、五月は金沢良美監督特集、以降は未定。問い合わせは025 243 5530(シネ・ウインド)まで。

定例会報告

(決定、確認、勧誘事項のみ掲載) 第8回(二月十六日) 約二十五人が出席

【お誘い】FM新潟で一時間ほどの番組(月に一回ほど)をスタートする。スタッフ募集。第9回(三月二日)約二十五人が出席

【確認】事務所は使った現状復帰と言ったことになっていないが徹底されていない。食器もその日のうちに洗ってほしい。ゴミの分別も徹底してほしい。 第10回(三月十六日)約十五人が出席

告知ばん

「豊崎博光写真展」 スタッフ募集 八月上旬の十日間、万代シティホール・リタナにて開催予定。世界各地の核施設(核実験場、原発事故地、ウラン採掘場などを含む)の写真、約百点を展示する。次回ミーティングは四月十二日午後七時半から映画塾事務所。問い合わせ090 4835 4140(駒形)まで。

編集後記

イベント盛りだくさんのため、第六号は一月前倒しして発行しました。次回発行は八月中旬です。 【編集スタッフ】星龍雄 【題字】宮川直子

映画塾トーク

PFFの歴史、特色について教えてください

もともと「びあ」は、一九七二年に中央大学映画出身のメンバーを中心に映画の情報誌として創刊した雑誌です。それだけに映画に

ついては、今も変わらず、PFFは現在も、映画の新しい才能の発見、育成」を基本テーマに据えています。

八八年からコンペティション形式の「PFFアワード」に移行し、映画監督をはじめとするクリエイターの方々にも審査員に加わっていただくグラウンプリ他を

PFF事務局プロデューサー 森本英利さん(42)

新しい才能発掘し22年 心の対話扱う応募作目立つ

は是枝裕和監督(「幻の光」)による映画講座を開いたときに、客席数百人

選ぶよつじしました。今年には九百四十本と過去最高の応募となりました。二〇一三年は、かなじやない不確実な世の中たい、つくれるかもしれないの応募ですが、背景は?、自分から生きるにはいと思っているのかもしれない。本当のころはよ、どうすればいいかという答えを表現活動に求めている。気がしますね。 「東京国際フォーラム・PFFシアター」三月で、映像世代で、生まれたときからテレビがあつて、映像もらつて作品の質も向上した。客席数百人

品にタッチが似てくるものが出るのはいつの時代も同じです。キアロスタミ風とか、岩井俊二風だつたら、たおやかな青春、で枝がチラチラ舞うとか、模倣であつても、その人らしい個性が表れていけばいいんですけどね。今年の一次審査が終わつた段階では、「自殺話」が多かったです。まあこれは四、五年周期でやつて来ますけど、いつの時代でも共通で、飽くなき興味を抱きながら自分や主人公の周りの人間関係を扱つた、いわゆる「四重半の世界」。

森本英利(もりもと・ひでとし)1957年3月、福岡県出身。音楽関係の仕事から、83年PFF事務局に入り現在に至る。

詳細はインターネットホームページで <http://www.ales.or.jp/~toshi/nej.html>